

真砂の庄司

安珍は、岩田川沿いの滝尻に向かう道を、左に逸れ、山の方へと上って行く。小高い山の斜面に……岩田川を見下ろすように、大きな屋敷が立っている。

そこが、真砂の庄司。清重の屋敷だ。

安珍は、清重の居室に通された。

「おーお、安珍殿……ご立派になられて……見違えるようじゃ」

入るなり豪放な声が降って来た。

「ははは……清重様。前に来た時も……同じ事を言っておられた……」。

言いながら、安珍は、手に持った包みを脇に置き、板の間の上に座る。

「そうじゃったかのお。」と清重は長い髭に埋もれた眼をしばたかせながら、満足そうに安珍を見つめている。

この真砂の地は、岩田川と石船川の合流地点にあたる。物資の運搬の集積地になっている。熊野から産出した鉱石や、材木は、この清流を利用して真砂の地に集められ、京都や奈良、ひいては、安珍の故郷である奥州にまで運ばれていく。

そのため、この真砂には、こういった物資を扱うたくさんの商家がある。

その商家の統括が、庄司であり、この清重なのだ。

清重は、その功績により、摂政である藤原家から、藤原の姓と従五尉の位をさずけられている。

そうとは、思えぬほど、腰が低い。

年齢は、もうそろそろ五十に手が届く……。

その手は……木の根のように膨れ上がっている。

がっしりとして、頑丈そうだ……。

ただ、上に立って命令するだけではない……。

自分自身が、先導して労働を行ってきた人間の手だ。



居室の側面には、安珍と、よく似た体格の青年が座って頭を下げた。

清重の息子の清次だ……。

清姫とは……腹違いの兄……安珍と同じ年齢だから……今年で二十二歳のはずだ。

同じ年齢であることもあって、昔から、よく張り合ってきた。

昔からの喧嘩友達といったところだ……。

しかし、今は、神妙な面持ちだ。

時として、清重の代理を努めている……というのは、風の噂で聞いている。